

たい。

4—建設工事紛争審査会から、今後に期待するところ

○梶原輝昭(国交省建設業課紛争調整官)

中央建設工事紛争審査会は建設業法に根拠を持つ行政型のADRである。法律上、建設工事の請負契約に関する紛争の斡旋、調停、仲裁を行う権限を有する。国土交通省に中央、各都道府県庁に都道府県審査会が置かれ計48審査会がある。

平成23年度、新規申請件数は164件(中央41件、都道府県123件)である。紛争処理手続き別に見ると、斡旋(15%)、調停(71%)、仲裁(14%)となっている。斡旋、調停は裁判所の民事調停に近く、紛争当事者間の話し合いによって和解(示談契約)し、斡旋は弁護士斡旋委員1名、調停は法律の委員1名、建築専門委員1名、法律または公務員経験者1名の3名で話し合いを促進している。仲裁は裁判を受ける権利を互いの合意の上で放棄し、第三者の判断に委ねて争いを立てない合意(仲裁合意)がある場合に、あらかじめ定めた仲裁委員の判断に従うものである。建築専門家の関わりは、建設工事紛争審査会で調停委員等となっていたことが前提である。建築専門家としての委員の発言が審査会を主導する。都道府県の建設工事紛争審査会事務局からは司法支援建築会議の存在を初めて聞いたとの回答を得た。年によっては新規の申請がない県もあり、3大都市圏に事件が集中しているため、地方での認知度が低いことはやむを得ない。今後は相談にのっていただければ事務局も救われるものと思う。

5—司法支援活動の今後の展望と期待

○仙田満

1)司法支援建築会議の支部組織の拡充、2)地方裁判所の建築専門部(集中部)を増やす必要がある、3)弁護士会と協働して日本建築学会が主導してADRを立ち上げる。4)すべての建築紛争を2年以内に解決する時間的目標を持つ、8)裁判官の移動も考慮し、関係性の維持を見据えて考えていく、5)設計・生産の諸問題の中でガイドラインを示し、契約書の重要性を発信する。

○小野徹郎

1)会員の若がえりと年齢上限の撤廃。年齢のバランスをとって真の活性化を目指す、2)司法支援建築会議の活動内容が十分に伝わっていないことをふまえて、情報発信能力の強化、3)建築訴訟関係の研究の発展と充実、評価システムと公開システムの議論が必要、4)大都市圏に訴訟が集中していることをふまえて地方裁判所の強化・充実、5)ADRへの協力の次のステップへ進む。

6—支部の代表として今後の展望と期待

○井野智

建築紛争事件を迅速に解決する以上に、未然に防止することがより大切である。現在、建築紛争フォーラムの実施を機に事件を整理し始めている。なお、北海道は司法支援建築会議会員のほとんどが札幌在住であるので、メンバーを北海道全域に広げていきたい。

7—会場からの質疑

○質問：柿崎正義(運営委員会普及・交流部会長)

40歳から50歳代の研究者、後継者を積極的に育てるべきではないか。

○仙田満

日本建築学会はADRに積極的に取り組むべきと考えている。また、研究者は研究課題が重要である。例えば、日本と海外の紛争解決のシステムに関する比較研究、海外のADRにおける専門家の役割、学術書の役割など。若い人たちに挑戦してほしい。

○質問：神田順(日本大学)

司法支援建築会議の活動が審理期間の短縮に貢献しているのか。

○福田千恵子

建築訴訟に関する正式な統計は平成16年4月から取り始めた。過去の文献によると、東京地裁の平成11年3月から12月までのサンプル調査では平均審理期間は31.5か月、平成22年の東京地裁の瑕疵の主張のある建築関係訴訟の平均審理期間は22.8か月となっている。対象となっている訴訟類型が厳密には同じではないという問題はあるが、短縮化していると思われる。この成果の背景には、司法支援建築会議のご協力があると考えて

いる。

○司会 まとめをお願いいたします。

4. まとめ・閉会 田中淳夫(支援部会長/田中淳夫研究室)

建築紛争の特徴として、裁判官や弁護士が建築の本質を分かっていないという実態がある。裁判官や弁護士はできあがったものを判定し、白黒つけることが仕事である。学会関係者は多様性のあるものをつくろうとし、指針づくりをしている。建築物は個別の生産品で、いろいろな性能があり、一つの判断では決められないことを、建築関係者は理解しているが、司法関係者(裁判官、弁護士)に理解していただくのは難しい。学会の指針類は基本的に新築の構造物、建築物が対象であり、判決でどのように扱うかは建築関係者と司法関係者では差がある。

今後の展望として若手の活用が重要であり、新たなメンバーを加え若返りをしたがまだ十分ではない。地方での地裁と司法支援建築会議の連携も課題としてあるが、活発にやっていたりけるかは地域により状況が異なる。ADRへの協力については、国が関与しているものにとりあえず協力するところまでこぎつけた。地方における支部とADRの連携、協力は今後の検討課題である。

記録：宇崎勝也(運営委員/日本大学)

*当日の全文記録は以下のURLからダウンロードできます。

[http://www.aij.or.jp/jpn/symposium/2013/sihou\(20130515\).pdf](http://www.aij.or.jp/jpn/symposium/2013/sihou(20130515).pdf)

RILEM ニュース

RILEM TC 230-PSC Application test and STAR

材料施工委員会 RILEM 小委員会

かぶりコンクリートの粗密の程度を非・微破壊で評価する研究分野の歴史は欧州において古く、これまでに発表された透気試験方法に関する論文(表面法と削孔法に分類)やRILEM(国際材料構造試験研究機関・専門家連合)に関する動向をまとめると図1に示すような年表となる(図中の番号は参考文献1)における文献番号を示す)。RILEM TC(技術委員会)が研究の進展と歩調を合わせて設立され、連続的に組織的な取り組みの系譜がこの図から読み取れる。TCはこれまでに、標準試験方法(RILEM CEMBUREAU法)を提案し、各種試験方法の共通試験(図中下線を対象)を実施し、そしてそのたびごとに重要なシンポジウムや技術の現状(TC 189-NEC)を開催・刊行してきた。現在、この流れを引き継いでいるのがRILEM TC 230-PSC(Performance-based specifications and control of concrete durability)である。2012年の4月にはオランダのフェンロー(Venlo)において、8種類の鉄筋コンクリート(RC)パネル(表1)の非破壊寿命評価(EN 206-1によるXC3、XD3とXS3(塩害環境および中性化環境)において50年および100年の寿命を満足するものを評価する)の共通試験共通試験を実施した(写真4)。この試験には、日本からは筆者のほか、横浜国大(林先生、小松君)および愛媛大学(氏家先生、岡崎先生)がこの共通試験に参加した。本

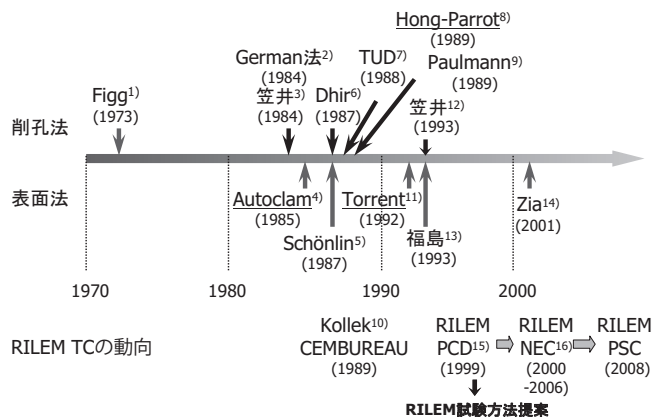


図1 | 透気試験に関する研究の系譜

パネル	セメント種類	W/C	養生	かぶり(厚さ)mm	
				表	裏
1	CEMI	0.44	1日以内に脱型以降気中養生	30	50
2	CEMI	0.44	脱型以降材齢7日までプラスティックフィルム養生	30	50
3	CEMI	0.54	1日以内に脱型以降気中養生	30	50
4	CEMI	0.54	脱型以降材齢7日までプラスティックフィルム養生	30	50
5	CEMII/B-V	0.4	1日以内に脱型以降気中養生	30	50
6	CEMII/B-V	0.4	脱型以降材齢7日までプラスティックフィルム養生	30	50
7	CEMII/B-V	0.59	1日以内に脱型以降気中養生	30	50
8	CEMII/B-V	0.59	脱型以降材齢7日までプラスティックフィルム養生	30	50

表1 | パネルの種類



写真1 | 左上: パネル全景, 右上: トレント法, 左下: 横浜国大チーム, 右下: 打ち上げ

試験に適用された透気・透水(吸水)試験方法は以下のとおりである。

- ・トレント法
- ・シングルチャンバー法(筆者)
- ・表面吸水試験(SWAT: 横浜国立大学 写真1参照)
- ・シール式表面透気試験(愛媛大学)
- ・Autoclam法
- ・パッカー法(下図のGerman法)

2012年に南アフリカのケープタウン(下写真)、2013年にスイスのチューリッヒで最終ミーティングを開催し、以下の目次構成に関する技術の現状を取りまとめた(カッコ内は取りまとめ担当者)。



写真2 | ケープタウン大学での会議の様子(左: トレント氏, 中央左寄りが委員長の Hans Beushausen 博士)

1. Introduction(Hans Beushausen)
2. Durability of reinforced concrete structures(Lars-Olof Nielsson)
3. Prescriptive durability specifications(Roberto Torrent)
4. Test methods for concrete penetrability(Dubravka Bjegovic)
5. Principles of the performance-based approach for concrete durability (Hans Beushausen)
6. Sampling criteria and statistical evaluation(Luis Fernandez Luco, DC, FJ, FM)
7. Responsibilities(Dough Hooton)
8. Examples of performance-based approaches for concrete durability (Hans Beushausen)
9. Statistical bases for assessing the cover depth in reinforced concrete structures(Andre Monteiro)
10. Comparative Testing(Luis Fernandez Luco)
11. Conclusions and final remarks(HB, JG, RT, LFL)

参考文献

- 1) 今本啓一、山崎順二、下澤和幸、永山勝、二村誠二: かぶりコンクリートの透気性に基づくRC構造物の耐久性能検証に向けた基礎的研究 — 各種試験方法における透気性の指標値と中性化深さの関連 —、日本建築学会構造系論文集、第638号、593-599、2009年4月

今本啓一/東京理科大学